

(様式 3 号)

## 学位論文の要旨

氏名 播磨 博文

## 〔題名〕

Differential Diagnosis of Benign and Malignant Branch Duct IPMN Using Contrast-Enhanced EUS

(造影超音波内視鏡検査による分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍の良悪性鑑別診断)

## 〔要旨〕

背景と目的：

本研究の目的は、分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍（分枝型 IPMN）の良悪性鑑別診断における造影超音波内視鏡検査（CE-EUS）の役割を明らかにすることである。

方法：

当施設で computed tomography (CT) と超音波内視鏡検査 (EUS) を施行し、分枝型 IPMN と診断した 50 例を対象とした。CE-EUS は EUS で結節様病変を認めた場合に施行した。各画像検査における分枝型 IPMN 内の壁在結節診断の正診率を評価した。また、各画像検査における壁在結節高の計測誤差値を計算し比較した。さらに計測した壁在結節高から悪性分枝型 IPMN を診断するための最適 cut-off 値を Receiver operating characteristic 曲線解析を用いて決定した。

結果：

50 例中 15 例は壁在結節を伴う分枝型 IPMN の診断で手術が施行され、35 例は経過観察された。手術が施行された 15 例中 14 例に病理組織学的に壁在結節が確認された。壁在結節診断の正診率は、EUS 単独では 72% であったが、EUS に CE-EUS を併用することで 98% に向上した。壁在結節高の計測誤差値を比較すると、CE-EUS は CT および EUS よりも有意に優れていた（計測誤差中央値 CT: 3.3 mm vs CE-EUS: 0.6 mm,  $P < 0.05$ ; EUS: 2.1 mm vs CE-EUS: 0.6 mm,  $P < 0.01$ ）。CE-EUS で計測した壁在結節高の cut-off 値を 8.8 mm に設定すると、悪性分枝型 IPMN 診断における正診率は 93% であった。

結論：

分枝型 IPMN の良悪性鑑別の決定において、壁在結節高計測に CE-EUS を用いることは高い診断的価値をもたらす。

学位論文審査の結果の要旨

医学系研究科応用分子生命科学系 (医学系)

報告番号	甲 第 1413 号	氏 名	播磨 博文
論文審査担当者	主査教授	山崎 隆弘	
	副査教授	坂井田 功	
	副査教授	田邊 剛	
学位論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。) <b>Differential Diagnosis of Benign and Malignant Branch Duct IPMN Using Contrast-Enhanced EUS</b> (造影超音波内視鏡検査による分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍の良悪性鑑別診断)			
学位論文の関連論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。) <b>Differential Diagnosis of Benign and Malignant Branch Duct IPMN Using Contrast-Enhanced EUS</b> (造影超音波内視鏡検査による分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍の良悪性鑑別診断) 掲載雑誌名 World Journal of Gastroenterology 第 卷 第 号 P. ~ ( in press )			
(論文審査の要旨)  背景と目的：本研究の目的は、分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍（分枝型 IPMN）の良悪性鑑別診断における造影超音波内視鏡検査（CE-EUS）の役割を明らかにすることである。 方法：当施設で computed tomography (CT) と超音波内視鏡検査(EUS)を施行し、分枝型 IPMN と診断した 50 例を対象とした。CE-EUS は EUS で結節様病変を認めた場合に施行した。各画像検査における分枝型 IPMN 内の壁在結節診断の正診率を評価した。また、各画像検査における壁在結節高の計測誤差値を計算し比較した。さらに計測した壁在結節高から悪性分枝型 IPMN を診断するための最適 cut-off 値を Receiver operating characteristic 曲線解析を用いて決定した。 結果：50 例中 15 例は壁在結節を伴う分枝型 IPMN の診断で手術が施行され、35 例は経過観察された。手術が施行された 15 例中 14 例に病理組織学的に壁在結節が確認された。壁在結節診断の正診率は、EUS 単独では 72%であったが、EUS に CE-EUS を併用することで 98%に向上した。壁在結節高の計測誤差値を比較すると、CE-EUS は CT および EUS よりも有意に優れていた (計測誤差中央値 CT: 3.3 mm vs CE-EUS: 0.6 mm, $P < 0.05$ ; EUS: 2.1 mm vs CE-EUS: 0.6 mm, $P < 0.01$ )。CE-EUS で計測した壁在結節高の cut-off 値を 8.8 mm に設定すると、悪性分枝型 IPMN 診断における正診率は 93%であった。 結論：分枝型 IPMN の良悪性鑑別の決定において、壁在結節高計測に CE-EUS を用いることは高い診断的価値をもたらす。  本研究は、分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍の診断に造影超音波内視鏡検査を用いる意義を明らかにした論文である。よって、学位論文として価値あるものであると認められた。			

備考 審査の要旨は800字以内とすること。